

高校教員に聞く！「高校教育の課題と生徒の変化、大学への期待」

大学よりも先に「少子化」に直面している高校に、教育改革や生徒募集の課題、生徒の変化と大学への期待などを聞く。

高校名	札幌第一高等学校	尚志高等学校	群馬県立高崎北高等学校	仁川学院中学・高等学校	第一学院高等学校
話を伺った方	進路指導部長 津田 将史 教諭	進路指導部・特別進学コース主任 佐藤 豪 教諭	探究担当 志村 克樹 教諭	教頭・進路部長 古田 修士 教諭	教育運営部長・四ツ谷キャンパス長 倉澤 弘明 教諭
学校概要	北海道札幌市/私立/共学/普通科(東大・医進Excellenceコース、Liberal artsコース、Ambitiousコース)/1学年400名 ※2026年度から現コースへ移行	福島県郡山市/私立/共学/普通科(特別進学コース、総合進学コース)、情報総合科/1学年465名(普通科305名・情報総合科160名)	群馬県高崎市/公立/共学/普通科/1学年240名	兵庫県西宮市/私立/共学/普通科(アカデミアコース、カルティベーションSコース、カルティベーションコース)/1学年280名(内部進学者を含む)	通信制/本校は茨城県高萩市(高萩校)・兵庫県養父市(養父校)。その他全国に68キャンパスを設置/株式会社立/共学/スタンダードコース、ベーシックコース、プレミアムコース(大学進学専攻、社会探究×総合型選抜専攻、グローバル専攻、韓国語学・文化専攻、AIスキル専攻、アート表現専攻、デジタルコミュニケーション専攻、デジタルイラスト専攻)、スタンダードコース_新スタイル(第一学院 managaraBASE)、スポーツコース、芸能コース、美容コース、ベクトコース、eスポーツコース、本校通学コース、Mobile HighSchool/1学年約3,000名
主な進学先・利用入試・文理の割合	東京大学、京都大学、大阪大学、一橋大学、東北大学、名古屋大学、九州大学、札幌医科大学、旭川医科大学、北海道大学、小樽商科大学、北海道教育大学札幌校、室蘭工業大学、弘前大学、公立千歳科学技術大学、高崎経済大学、北星学園大学、北海道科学大学、北海道医療大学、北星学園大学、法政大学、近畿大学、中央大学、藤女子大学、日本医療大学、東洋大学など 利用入試：一般8割・年内2割／文理：文系4割・理系6割	福島大学、福島県立医科大学、弘前大学、北海道大学、筑波大学、新潟大学、早稲田大学、東京理科大学、明治大学、青山学院大学、法政大学、同志社大学、立命館大学、成蹊大学、獨協大学、國學院大学、日本大学、東洋大学、国際医療福祉大学など 利用入試：一般2割・年内8割／文理：文系7割・理系3割	群馬大学、高崎経済大学、群馬県立女子大学、共愛学園前橋国際大学、高崎健康福祉大学、群馬バース大学、高崎商科大学、東洋大学、千葉工業大学、東海大学、専修大学、日本大学、大東文化大学、神奈川大学、武蔵野大学など 利用入試：一般6割・年内4割／文理：文系6割・理系4割	関西大学、関西学院大学、立命館大学、近畿大学、甲南大学、龍谷大学、大阪経済大学、大阪工業大学、追手門学院大学、神戸学院大学、神戸女学院大学、武庫川女子大学など 利用入試：一般5割・年内5割／文理：文系6割・理系4割	大阪大学、北海道大学、東京外国語大学、東京藝術大学、東京科学大学、東京都立大学、電気通信大学、千葉大学、新潟大学、早稲田大学、慶應義塾大学、上智大学、東京理科大学、明治大学、青山学院大学、立教大学、津田塾大学、新潟産業大学、キングストン大学(イギリス)、華東師範大学(中国)など 利用入試：一般約4割・年内約6割／文理：文系約9割・理系約1割
生徒募集の状況と課題、取り組み	高校教育無償化で私立人気高まる ▶札幌は、伝統的に公立の進学校人気が根強いエリアのため、従来は定員割れる年もあったが、高校教育無償化の影響に加え、コースの一新や制服と私服の併用といった学校規則の見直しなどを行い、それらをPRした結果、受験者数・入学者数が増加。特に、推薦入試の志願者・入学者は劇的に増加し、例年20人程度だった入学者が、2026年度入試では160人に増えた。 ▶ただし、中長期的に見た場合、札幌市の出生数は今後も減少が続いていくため、楽観視はできない。アカデミックツアーをはじめとした「本物に触れる機会」の提供・発信を継続し、募集につなげていきたい。	第1志望校として選ばれるよう広報を強化 ▶専願での入学者が8割程度を占めている。近年は県立高校の倍率が低下しているため、特に併願での受験者が例年多かった特進コースについては、第1志望として選んでもらえる魅力づくりを進めている。 ▶個別の学習・進路サポートや探究活動の充実といった、教育の強みをこれからも継続して伝えていく。 ▶中学生や保護者に学校生活の実態が伝わるよう、SNSを活用した情報発信を強化。生徒の日常や学校行事での様子など、リアルな姿を定期的に発信することで、学校の雰囲気や教育姿勢を伝える取り組みを進めている。	特色を伝える募集施策を模索 ▶高校教育無償化の影響で近隣の私立が定員を維持・拡大する一方、公立は規模縮小が進み、公私の立場が逆転しつつある。 ▶本校も以前は群馬県で屈指の倍率を誇っていたが、近隣に私立高校が多いこともあり、直近の倍率は約1.05倍まで低下した。 ▶県立高校の入試が実質的に2回から1回に集約される中、私立は複数回入試を設けているのも、大きく影響している。 ▶教育の特色を伝える募集活動をしたいものの、公立高校ではそれを教員が担わざるを得ず、予算もないため、難しい現状がある。	地道な改善の積み重ねでブランド力を向上 ▶比較的安定的に生徒募集ができている。これからは私立学校として、建学の精神への理解と魅力的な教育プログラムで「選択される」ことが不可欠。カリックミッションスクールとしての使命を果たしつつも、社会や地域に求められる教育の実現に向けて入試広報や校則の見直しも含め、時代に合わせて革新する姿勢でいる。 ▶新しいコース制、教育カリキュラムの変更等、学校改革に向けて、まずは学校評価アンケートの結果を基に地道な改善を積み重ねてブランドを磨いている。	出身校の教員と連携し、「助めてもらえる高校」に ▶通信制高校の合同進学相談会では、「どの高校もよいことを言っていて決められない」と、保護者が疲れてしまう場面をよく見かける。そうした中で、本校は生徒にとっての「居場所」となっていることを前面に打ち出し、差別化を図っている。 ▶各キャンパスの教職員が、生徒の中学時代の担任教員などと連携し、過去の出来事や、現在の生徒の状況などを共有している。その結果、「第一学院高校なら生徒を任せられる」と、進学先として助めてくれる中学教員などが増えてきた実感がある。
教育の特徴と成果、課題	自主自立型教育への転換と探究・英語強化 ▶従来の詰め込み型・規律重視の教育から、生徒の「自主自立」を重んじる学び方重視の教育へ転換。制服・校則の見直しやコース再編を通じて、時代に合った学びへと刷新を図っている。併せて、学校設定科目*「LA(リベラルアーツ)探究」を導入。1コマの授業づくりに多様な教員が関わり、外部講師として各分野の専門家を招聘するなど、教科横断的・探究的に、さまざまな学問に触れる時間を増やしている。 ▶北海道内にとどまらず、世界を視野に入れた人材に成長してほしいという願いから、英語教育を充実させている。海外修学旅行や語学研修、オンライン英会話など、実践的な英語を身に付けられる機会を数多く提供し、外部英語検定試験でのスコア目標達成をめざす。 ▶中学までの「与えられる学習」から、「自ら考える学習」への移行に対応できない生徒や、地道な学習への耐性が不足している生徒が一定数おり、自主自立型教育と生徒の実態とのギャップをどう埋めるかが今後の課題。	「人づくり教育」を軸にした個別最適な学び ▶「人づくり教育」を掲げ、生徒との対話を通じた個性の伸長と資質・能力の育成を重視している。特進コースでは独自の行事を実施。1・2年生の夏にはサマーキャンプ(学習合宿)、秋には大学・企業訪問を行っている。2025年度からは大学の学祭訪問も実施。地域との関わりで得られた体感や研究室の発表を聞くことが、キャリア教育になり、資質向上につながる。 ▶学習指導要領改訂を見据えて、2027年度に特進コースの教育課程を刷新予定。「個別最適」をテーマに、生徒一人ひとりがより自由に授業を選択できるカリキュラムに改定。 ▶建学の精神の一つ「尚志必成(明確な目標を立て絶えず努力する)」を体現する「尚志必成演習」を学校設定科目*として新設。教科学習や部活動、探究活動などから自由に活動を選択して取り組む時間とする。教員は目標設定と振り返りのシートを活用し、生徒がその後の学習や進路をデザインできるよう、伴走型で指導する。	インターンシップ起点で始まる探究学習 ▶社会で活躍するための資質・能力の育成に向け、総合的な探究の時間で探究型キャリア教育「あららぎ探究」を実施している。 ▶「あららぎ探究」では、1年次は「2040年の仕事を考える」をテーマに問いを立て、関心のある仕事のある職場でのインターンシップを通じて考察・発表する。2年次は、社会課題を解決する個人の探究活動のために大学や企業等の協力も得ながらフィールドワークを実施。3年次は任意で2年次のテーマの解決に向け、プロジェクト活動を行う(例:子どもの野菜嫌い解決のために母校に給食メニュー提案)。 ▶インターンシップ先は半数以上の生徒が自分で開拓。県外へ出向く生徒も増えており、年々挑戦の幅が広がっている。 ▶探究学習を起点に、生徒の学び合いが日常化。教科の授業でもグループ学習などの協働的な学習が当たり前になっている。	柔軟なコース選択で自己実現をめざす ▶カリックミッションスクールとして建学の精神「和と善」を掲げ、教育の目的である「人格の完成」をめざしている。 ▶離開国公立大学への進学を想定するアカデミアコース、離開私立大学への進学を想定するカルティベーションSコース、私立大学への進学を想定するカルティベーションSコースの3コースを設けている。 ▶1年生は同一のカリキュラムで、コースごとに深度を変えている。 ▶コース変更の有無にかかわらず、全員が1年生の終わりに「学びの計画書」を作成。面談では、「なぜそのコースを選ぶのか」「どのような将来像を描いているのか」を言語化する。コースを変更する場合は、「学びの計画書」と成績等を総合的に評価し、選考する。	社会的自立を支える多様な学びを設計 ▶25歳での社会的自立を目標に、生徒一人ひとりに合った学習環境を提供し、つまずいても自分で立ち直れる力の育成を重視している。 ▶前向きな言葉の投げかけや、ボランティア活動などの他者への奉仕を含む「プラスサイクル指導」が特徴。自分を尊敬できる選択を積み重ね、自己肯定感を持って成長してもらおう。 ▶最大週2日から最大週5日の通学型と、完全オンライン型の2つの学び方を用意。プレミアムコースの大学進学専攻や、進学を想定するコースでは、大学教員と連携した教材等で学問への興味関心を深めるほか、希望する入試方式に合わせて学習をする。 ▶授業時間とは別に、ボランティア・商品開発など、現実の社会課題に挑戦する「コミュニティ共育」や「プロジェクト型学習」を行う。多様な経験が、生徒の「好き」「できる」気持ちを育む。
進路指導の特徴と成果、課題	視野を広げて生き方を軸に据えた進路観への転換 ▶特定の職業に就くためのキャリア教育ではこれからの社会変化に対応できないと考え、「どの大学に行くか」「どの職業に就くか」ではなく、「どのように社会で生きるか」をゴールとして、その実現のために必要な環境(進学先)を考えることを進路指導の主眼に置いている。 ▶生徒の視野拡大や進路意識の喚起につなげるために、北海道内では得にくい最先端の研究や働き方に触れる機会を積極的に提供。道外の大学の教員による講演や研究室訪問(年間約20回)のほか、JAXAやGoogleの研究部門・東京大学などを訪問する「アカデミックツアー」や、活躍する卒業生との少人数対談など、外部人材も積極的に巻き込んだ行事を展開している。	生成AIも利用しながら大学選びの情報収集 ▶生徒の「学びたいこと」「なりたい将来像」を尊重し、ワンランク上の進路実現をめざす指導が学校全体の方針。 ▶1年生では興味・関心の発見のために、進路行事として大学や企業訪問、出張講義・講演会を複数実施。それらをふまえて、2年生の間に志望校とどの入試方式で受験するかを決定する。その際、生成AIも活用しながら情報収集させることで、それまで気付かなかった進学先も視野に入れて検討させている。 ▶探究学習では、生徒が希望の進路を意識した個人テーマを設定し、社会や学問への理解を深めながら、進学する意義を深掘りする。 ▶生徒の志向に合う進路決定のために、独自の大学検索システムを整備中。	探究が育む、学びたいこと重視の大学選び ▶1年生では自分・社会・学問分野を知ることと目標とし、2年生から大学や入試科目を考える流れを学校全体で設計している。その一環として、大学見学や体験授業、探究学習などを実施。 ▶探究の成果として、第一志望はもちろん、併願大についても偏差値だけではなく、「学びたいこと」で選ぶ生徒が増えている。 ▶理系志望者を増やしたいものの、受験を考えると、理系選択を促しづらいのが多くの教員の心情。理系科目(特に物理)の勉強は負荷が高く、点数を取る、合格することだけを考えた場合、文系のほうが有利に働くため。	大学との継続的な協働で、高大接続を日常に ▶人口減少が進み、生徒の進路意識にも変化が見られる中、単に進学先へ送り出すのではなく、高校と大学が双方を理解し、一時的な「高大連携」ではなく「高大接続」となるよう、長期的に協力していくことが重要だと考えている。その一環として、生徒が課題に取り組み、成果を発表する高大「接続」プログラムを全コースに設けている。 ▶「行ける大学」ではなく「行きたい学びたい」と思え、かつ生徒個々の性格やタイプと合致した大学を考えさせる。オープンキャンパス実施日以外の大学訪問や、個別のプログラムで日常の学びを体験することを奨励している。	通信制の強みを生かして、生徒の個性を伸ばす ▶「生徒のやりたいをベースにした主体的な進路決定」が基本方針。通信制の柔軟な学習環境を生かし、プロジェクト型学習などに授業時間を充て、その成果を進路選択に生かすことを後押ししている。 ▶グループ校である新潟産業大学への進学者が多い。例年100〜200名程度が、主に通信課程へ進学している。特別聴講生制度があり、高校在籍のまま大学の授業を受講し、進学後に単位化することも可能。高校教員が大学側にも在籍し、通信課程でも担任が付くコースがあるなど、同大学は本校や通信制高校出身の学生が安心できる学習環境を構築している。
生徒や保護者の志向や変化	大学進学への意欲向上と根強い道内志向が課題 ▶第1志望での入学者の増加は喜ばしい反面、入学して満足してしまい、その後の向上心や競争意識が弱い生徒が増えている。また、塾で一通り「やるべきこと」を与えられて合格した経験から、試行錯誤を伴う学びに対する耐性が弱い生徒も見られる。 ▶生徒には北海道にこだわらず進路を検討するよう指導しているが、保護者は主には経済的理由から、依然として北海道内の国公立大学志向が強い。保護者説明会では奨学金や、国公立大学の学費の違いをしっかりと伝えることで、道外への進学可能性を感じてもらえるようにしている。	保護者への進路情報共有が重要 ▶多くの生徒が情報収集に生成AIを使うようになっている。情報収集のスピード感は大きく向上しているが、AIの応答を鵜呑みにしてしまいう危険性がある。情報を取捨選択する判断力の育成が課題になっている。 ▶SNSで自分の見たい情報だけに触れているからか、好きなことには熱心に取り組む一方、苦手なことにに関心が向かない傾向も見られる。 ▶保護者は子どもの意思を尊重し、自身で大学を調べなくなってきている。近い・安い大学を好み意識も依然として見られ、生徒だけではなく保護者への情報提供や進路指導方針の共有も強化する必要がある。	外に出る経験で、進学先の選択肢が拡大 ▶自分でアポをとリ、外に出て、県内外の企業や大学等での探究学習に取り組んだ結果、進路選択においても、学びたい内容を軸に県外の大学までしっかり調べ、何が学びたいかを言語化できる生徒が増えている。 ▶保護者には県内志向が残り、県内国公立大学を前提に考える家庭も多い。一方で、保護者は「子どもがしたいことをさせてあげたい」という思いもあり、「近くにいしてほしい」という思いと両方を抱えている。	大学進学のための意識の醸成が課題 ▶生徒は「近い大学」への志向が強い。大学が多い地域性の中で、大学を就職の通過点のように捉え、「大学に入る」こと自体が目的化し、進学先の決定理由が希薄な生徒が増えている。だからこそ、「行きたい」「学びたい」「自分のタイプや考え方に合致する」大学を選ぶ指導を強めている。 ▶保護者は安全志向が強く、自宅から通える大学を重視する傾向も強い。保護者説明会では「社会人になって初めて通方で働くほうが負担が高い」など、経験と「人脈」を広げる意義を繰り返し伝えている。	自己肯定感の向上が学習の動機付けに ▶入学者は不登校経験を持つ割合が高い。また、以前は全日制高校からの転校生が中心だったが、近年は中学卒業後にそのまま高校1年生として入学する生徒も増えている。 ▶基礎学力に不安を抱えて入学してくる生徒が多い。そのような生徒には、テストの点数や模試の偏差値を上げることだけを目標にするのではなく、外の活動で自己肯定感を高め、「自分にもできる」感覚を学習意欲につなげられるよう支援している。
大学への期待、要望	生徒に共有しやすい形で情報提供を ▶どのような奨学金があるかなど、熱意を持って伝えてくれる大学もあるが、そうした情報の全てをわれわれ教員が整理・翻訳して生徒に伝えるには限界がある。大学案内だけではなく、情報を要約した1枚ものの資料や動画など、生徒に伝えやすい形で情報提供してもらえると、紹介しやすい。 ▶教育方針や育成したい人材像を具体的に語る大学は信頼できる。例えば地域医療を担う人材育成に重点を置いた教育に熱心な北海道医療大学や、育てたい学生と入試のコンセプトが明確な東洋大学など、しっかり教育をしてくれそうな大学には生徒を送り出したい。	探究の継続的なパートナーになってほしい ▶探究学習のさらなる充実、高校単独では難しい。多様な大学と、継続して関係を持ち、アカデミックな視点から探究へのアドバイスを得て、質の向上をめざしたい。低学年向けのキャリア教育として、学問や職業について伝える出張講義なども実施してほしい。 ▶生徒は偏差値ではなく、したいことで大学を選ぶようになっている。各大学の教育内容や強みについて、理解しやすい発信を望む。 ▶私立大学の入試制度は複雑すぎる。それぞれどのような生徒に適した入試か具体的にわかるようにしてほしい。	高校が相談しやすい窓口の設置を ▶大学と連携したい場合の相談先が不明な大学も少なくないため、窓口を設けてくれるとありがたい。高崎商科大学や共愛学園前橋国際大学はそうした窓口があり、継続して良好な連携が取れている。 ▶何を基準に、どの水準で評価するのがわかりにくい総合型選抜を課す大学が多いので、情報提供を望む。本校の探究活動で生徒たちが積んだユニークな経験をしっかりと評価してくれるような選抜を実施する大学があれば、生徒に助めやすい。	教育と研究内容が伝わる情報発信を期待 ▶大学には「明確な目的を持っている」「専門的な分野を学び、研究したい」と考える「生徒を入学させてほしい」。 ▶就職率中心の広報に偏るのではなく、どんな学びができ、どんな教員がいるのか、知の探究を第一義に発信してほしい。 ▶アドミッション・ポリシーは抽象的になりがち。何をしている生徒が合致しているか、具体的な情報の発信を望む。 ▶教員が学生と研究に取り組む、愛を持って指導している大学、学生が「学んでいる」姿が見える大学には、安心して送り出しやすい。	高校での活動経験を継続できる大学を勧めたい ▶プロジェクト活動などを経験し、主体性のある生徒が多いので、大学進学後も地域連携やPBLで活躍する卒業生が多い。そのため、地域活動やPBLを積極的に行っている大学であれば、本校の生徒が「居場所」を見つけやすいので、助めやすくなる。 ▶新潟産業大学はスクールモットーに「地域に学び、地域をおこす」掲げており、本校の「地域で学ぶコミュニティ共育」と親和性が高い。

* 学習指導要領で定められた科目以外で、学校が独自に設定する科目